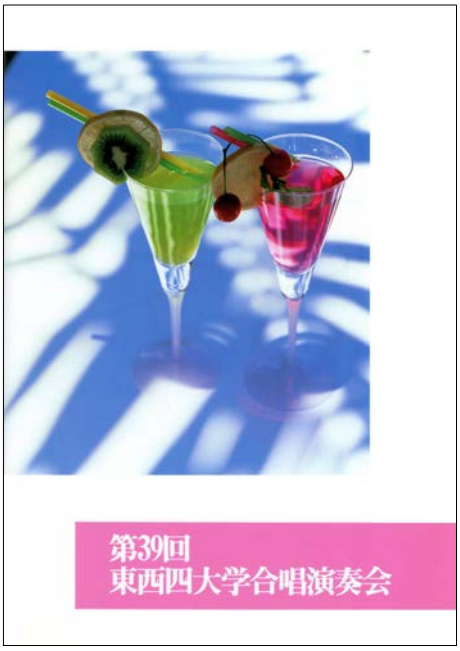
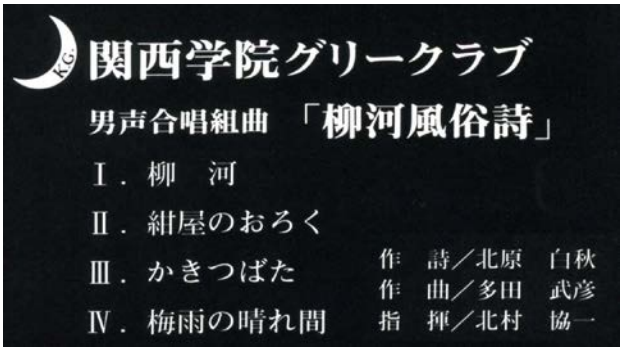
第39回東西四大学合唱演奏会【1990年（平成2年）6月24日・昼夜】フェスティバル





関西学院グリークラブ

男声合唱組曲
柳　河　風　俗　詩

男声合唱組曲「柳河風俗詩」について

多田　武彦

昭和28年、私は京大を卒業して銀行員になった。映画監督への夢が消えたので、作曲もやめようかと思ったが、故清水脩先生から、「ア・カペラの男声合唱曲を書く人が少い。多田君は学生時代男声合唱団の指揮をやっていて、男声合唱の機能をよく知っているから、親しみやすい日本の歌をつくってみてはどうか」と助言され、ア・カペラの男声合唱曲を書くことだけは続けてみようか、と思い直した。

清水先生は当時、月一回来阪され、天王寺の、某小学校の音楽室で作曲のレッスンをしておられたので、私も対位法を習うことにした。

習いはじめて二回目に、清水先生は私に、「法則ばかり勉強しても不十分だ。次回には何かエチュードを書いて持って来なさい。」とおっしゃった。ちょうど第一曲の「柳河」が昭和28年合唱コンクール課題曲募集の際の佳作に入選していたので、これを含めて、合唱組曲を書こうと思い、一カ月で完成した。

先生に見てもらったのは、音楽室のガラス窓がガタガタと音を立てる木枯の強い夜だったことを妙によくおぼえている。

三カ所ほど先生に直してもらったあとで、「テーマのとらえかたも組曲としての起承転結も、なかなかおもしろい。ただ今後は、あまり歌い手の音域を気にせず、もう少しダイナミックな、奔放なタッチで作曲した方が良い」との講評を受けた。

あれから37年経ち、清水先生も他界され、私も今年還暦の老人になったが、今ふりかえってみると、清水先生から教わった「詩と音楽とのかかわりあいの大切さ」や、音楽以外にご教示を受けた「人生哲学」は、私のその後の人生の貴重な道標となった。特に「作曲→演奏→多くの人との出会い→これらの人からのご教示→作曲→演奏……」という循環は、数多くの作品の中にも、銀行の仕事の中にもたえずくりかえされて行った。

組曲「柳河風俗詩」は、私にとって、このような位置に在る。北原白秋先生の、その郷国柳河に対する思い出の一言一言も、私の心の中に終生鳴り続けていくことだろう。

風の便りに聞くと、今年関学グリーのメンバーが減少したらしい。ところで、昭和45～46年頃の北村協一先生指揮による関学グリーの「柳河風俗詩」や「雨」や「中勘助の詩から」の演奏は今もＣＤに生きている。40～50名くらいのメンバーだが名演である。そういえば、畑中先生がはじめて慶応ワグネルの指揮をされた昭和35～36年頃の「ジプシーの歌」も「草野心平の詩から」も、50名前後による名演であった。合唱は、人数の多寡が問題ではなくて、個々の磨かれた実力や個性を、パート内の隣人と合わせ、他のパートと調和させ、そして、全体としての統一性に導いていくのが眼目である。少人数ながら世界中が聴き惚れたタリス・スコラーズが好い例であり、モントリオール・フィルを一流オケに仕立てたシャルル・デュトワが好い例である。

伝統ある関学グリーのご健斗を祈る。